中学生における攻撃性と親子関係の関連について

学校教育専攻
教育臨床コース
村岡万由子

指導教員　小坂　浩嗣

1. 問題と目的

近年，青少年が引き起こす傷害，暴行，殺人などの犯罪や非行が大きな問題となってきている．そのような問題に関わる要因として攻撃性が非常に注目されている．

しかし，攻撃性のはっきりとした概念規定はなされていないのが現状である．攻撃性がどのように捉えられてきたのかを検討するため，(1)内的衝動説，(2)情動発散説，(3)社会的機能説の3つの理論仮説を概観した．そこから，攻撃性には破壊的，否定的なネガティブな側面と，自己主張や自己保存に有益なポジティブな側面の2つの側面があることが明らかとなった．そこで，本研究ではこの2側面を包括したものを攻撃性として捉えることとした．

攻撃性に影響を与える環境要因として様々な要素が考えられる中，最も注目されているのが親の養育態度をはじめとする親の要因である．従来より，母親が子どもに与える影響の重要性が強調されてきたため，母子関係と子どもの攻撃性に関する研究は数多いが，父子関係とそれを調べた研究は少ない．また，先行研究では父親，母親それぞれが子どもの攻撃性に与える影響が検討されているが，実際の家庭の中では，父子関係と母子関係が互いに影響しあって，子どもに何らかの影響を与えていると考えられる．

そこで，本研究では攻撃性と親子関係の関連について検討することを目的とした．

2. 対象と方法

(1)対象

回答に不備がなく，虚偽尺度で回答の信頼性が確認された，A県B公立中学校の1年生66名（男子30名，女子36名），2年生114名（男子54名，女子60名），3年生150名（男子79名，女子71名）の全330名であった．

(2)方法

1)質問紙の構成：攻撃性質問紙（安立，2001）から29項目4件法，親子関係診断尺度EICA（辻岡・山本，1976）から父母各12項目4件法（以下父用を父子関係質問紙，母用を母子関係質問紙），MMPIより虚偽尺度として5項目を採用した．

2)手続き：2005年7月中旬，各クラスで一斉形式によって調査が実施された．

3. 結果

(1)尺度の構成

攻撃性質問紙について因子分析を行った結果，「積極・能動」，「懐疑」，「自責」，「他責」因子の4下位因子を抽出した．父子関係質問紙について因子分析を行った結果，「受容性」，「統制性」因子の2下位因子を抽出した．母子関係質問紙について因子分析を行った結果，「受容性」，「統制性」因子の2下位因子を抽出した．

(2)各質問紙の性差，学年差

攻撃性質問紙については，性差・学年差はみられなかった．

父子関係質問紙の全体の得点において性と学年の交互作用がみられ，男子において3年生よりも1年生の方が高い得点を示していた．受容性因子においては有意な学年差がみられ，3年生よりも1年生の方が高い得点を示していた．

母子関係質問紙の全体の得点において有意な学年差がみられ，3年生よりも1年生の方が高い得点を示していた．統制性因子においても有意な学年差がみられ，3年生よりも1年生の方が高い得点を示していた．

(3) 攻撃性と親子関係の関連について

父子関係（受容性，統制性），母子関係（受容性，統制性）を組み合わせて4種類の親子関係パターンをつくり，父親，母親単独で及ぼす影響だけでなく，両者の養育態度が影響しあって子どもの攻撃性に与える影響を階層的重回帰分析を用いて検証した．その結果は以下の通りであった．

1)父親の受容性と母親の受容性

積極・能動因子に交互作用がみられ，促進させる方向に影響を与えていた．自責因子に母親の主効果がみられ，促進させる方向に影響を与えていた．

2)父親の受容性と母親の統制性

自責因子に交互作用がみられ，促進させる方向に影響を与えていた．積極・能動因子に父親，母親の主効果がみられ，どちらも促進させる方向に影響を与えていた．懐疑因子，他責因子においても両親の主効果がみられ，父親は抑制させる方向に，母親は促進させる方向に影響を与えていた．

3)父親の統制性と母親の受容性

積極・能動因子に交互作用がみられ，促進させる方向に影響を与えていた．懐疑因子，自責因子，他責因子に父親の主効果がみられ，すべてにおいて促進させる方向に影響を与えていた．

4)父親の統制性と母親の統制性

懐疑因子と自責因子に父親の主効果がみられ，促進させる方向に影響を与えていた．

4. 考察

本研究結果において攻撃性に性差がみられなかった理由として，従来の「男は強く，女は弱い」というような性役割価値観が変化してきたことがあげられる．現在では，男らしさ，女らしさという二分化された性役割価値観の境界が曖昧になってきており，それが親の養育態度を通して子どもの性役割価値観に影響を及ぼし，攻撃性が性別に関わらず多様化してきたのではないかと考えられる．また，先行研究の結果より，攻撃性は成長の過程で，より洗練された表出方法へと変化していくことが示唆された．しかし，本研究において学年差がみられなかったことより，中学生では学年に関わらず不快感情の軽減を目的とする情動発散説に近い様式で攻撃性を表出しているのではないかと推測される．

3年生よりも1年生の方が，父親は受容的で母親は統制的であると認知していることが明らかになった．1年生の方が親の養育態度の直接的な影響が大きく，明確に認知されやすかったからであると考えられる．

攻撃性と親子関係の関連を検討した結果，他責因子は従来の先行研究の結果と一致するものとともに相違する結果も見出された．積極・能動因子や自責因子では交互作用がみられたところもあり，有意義な結果が見出されたといえる．さらなる検討の余地は残されているものの，子どもの攻撃性と親子関係には深い関連があり，父子関係が子どもの攻撃性に与える影響は，母子関係のそれに劣らず重要なものであるということが本研究より明白となった．